

---

# 白い闇

暁煌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白い闇

### 【著者名】

N4293D

【作者名】  
暁煌

### 【あらすじ】

T・M・Revolution／白い闇の歌詞を基に作者が想像したサイドストーリー的な作品です。（これは作者が持つイメージのため捉え方により嫌悪感を抱かれる場合がありますが、あくまで一例として捉えてください。また本作品はT・M・Revoluti  
onの作品を否定するなどの意味を持たず、尊敬心を持つて製作しました。）

## 1) 始まり(前書き)

本作品はT・M・Revolution／白い闇を題に作者が心に描いた背景です。

## 1) 始まり

何でこうなったのか . . .

嘆くことすら忘れて震えている。

誰かを殺めることも  
また傷付けることも  
まったく考えたこともない。

夢中で携帯のリダイアル機能を呼び出す。

「もしもししどうじょう大変なことになつて . . .  
助けて . . .」

僕が助けを求めたのは最愛の人。  
いつか教会で永遠を誓うはずの人。

雨のやまない部屋の窓から見える景色に、ガラでもなく昔泣いた映画のワンシーンを浮かべた。

主人公が友人を殺めてしまい罪悪感と悔いに悩んだ挙げ句、自ら「死」を選ぶ。  
「今の僕とそつくりにも程があるな . . .」  
自嘲気味に、そして力なく呟いて。

程なく、インター ホンが来客を告げる。  
彼女だつた。

開口一番。

「『いめんなさい。』

一瞬の隙間。

僕は彼女の言葉の意味を考えた。

尚も続く。

「本当はほんとうす分かつてた。

あなた . . . 昨日の夜から変だつた。」

昨日はデートだつた。

それに関わらず毎夜のメールを欠かしたことなどなかつた。

. . . 昨日を除いて。

「心配になつて、今朝方あなたの友達に聞いてみた。  
あなたに何かあつたみたいって言つてた。」

淡々と続けながら、窓の外を眺める僕に彼女は謝つた。

## 2) 最後の約束

「 . . . 旅行に行かないか? 」

突然の話題転換は普段の通りだが、今日は違つ。

「 高跳び . . . ? 」

彼女は刑事物語ドラマに出てきそうな言葉を返した。

少しの間を置いて、僕は答えた。

「 違うよ。ただ罪を償つ迄に君と最後の . . . そう、最後の思い出を作りたいだけだ。 」

旅行から帰つたら出頭するよ。 」

僕らはその日に内に電車に乗つた。  
学生時代に初めて行つた日帰り旅行と、  
同じ行き先。  
同じ一人と、  
違う空氣で。

それは隣の県の小さな海浜。  
冬を迎えたこの時季に誰もいない海。

片道数時間を持って到着した。  
この間、会話はない。

空が紫に変わると静かに彼女の手を手繰り寄せた。

「寒いね。」

「うん。」

もう決めたんだ。  
文字通りの決意を。

「先に帰つてくれないか。  
それと僕の机の一番上の引き出しを見てくれ。今まで言えなかつた  
ことがある。それを書いた封筒を読んで。」

彼女に助けを求める電話の直前に書いたんだ。  
今まで誰にも話してなかつた秘密と・・・それに対する謝罪。

彼女を見送ると僕はまた海浜に足を運んだ。  
彼女の僕に向けられた最後の笑顔を胸に抱いて。

夜が深まつたら石を抱えて海に沈む。

彼女は知つてか知らずか何も聞かないまま、街へと帰つた。

そして僕だけは . . .

雪の降りだした海へ向かう。

誰に知られるでもなく。

### ③) 白い闇

僕は彼女を見送った駅まで、手を繋いでいた。  
駅に着くと然り氣無く外して、微笑んだ。

永遠の別れを意味したようだ。

独りになつて思い出すのは、やはつこで数年に一度の流星群に願  
いを掛けた冬の日。

寄り添いながら、僕だけは今日  
「永久の別れ」を予感していた。

真冬の海は雪の華を誘つてゐる。

最後の一秒まで彼女の記憶が消えぬよう。君と描いた思い出を、や  
がて夜闇に融けゆく雪に重ねて。華やいだ僕の時間は、失われてゆ  
く。雪のように儚く。

\* \* \* \* \*

街へ戻ると真っ先に彼の自宅へ向かつた。  
そして彼の最後の約束・・・白い封筒を見つける。  
そこには彼の決意が文字として残っていた。

「・・・・・違う・・・・私のせいなのに・・・・震えながら涙が溢れた。

予感はしてた。覚悟もしてた。  
止めることも、出来なかつた。  
引き留めるなんて無理だつた。

もう遅い。

今から海浜まで行こうとも、日付が変わる。間に合わない。  
それでも・・・彼女は・・・電車に飛び乗つた。

彼の決意が分かつてた。そんな気がしていたから。言葉にしなくて  
も、私の心が彼に言つてしまつ氣がして、顔を見つめることが出来  
なかつた。

「いかないで」と言えたならどんなに・・・

代わりに誤魔化して

「寒いね」だなんて・・・馬鹿みたい。  
それが最後の会話になるなんて・・・

もう夜を向かえて雪と星が空を染めていく。

せめて一人で逝きたい！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4293d/>

---

白い闇

2010年10月10日04時51分発行